【303】

氏　名（本籍）	河合章男（千葉県）（かわい あきお）
学位の種類	博　士（情報学）
学位記番号	博甲第 4135 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	図書館情報メディア研究科
学位論文題目	**明治期の俳書･俳誌の研究**

主　査	筑波大学教授	綿抜豊昭
副　査	筑波大学教授	太田勝也
副　査	筑波大学教授	黒古一夫
副　査	筑波大学教授	小高和己
副　査	青山学院大学教授	廣木一人

論文の内容の要旨

本研究は，明治時代，俳文芸の伝達に中心的な役割を担った「俳書」及び「俳誌」というメディアの刊行の変遷を調査し，俳文芸の変化を考察したものである。

本研究の構成は以下の通りである。

1　研究の目的と概要
2　明治期の俳書と俳誌に関する先行研究と重要資料
3　明治俳書刊行の推移
4　明治期に刊行された和装の句集
5　活版印刷のメディアの変遷
6　俳人書誌
7　明治俳書総合目録データベース
8　結語

以下，本論にあたる１～７までの要旨を述べる。

「**1　研究の目的と概要**」は，本研究の目的と概要が述べられている。すなわち，本研究の目的は，明治時代の俳書・俳誌資料の目録を整備し，そのデータを基にして，当時の俳文芸にかかわる活動が，どのように行われていたのかについて明らかにすることにあり，さらに，明治時代の新しいメディアが，江戸時代から続く伝統的な文化とつながり，あらたな形態・内容の文化を生み出していく事例を報告することにあるとする。

「**2　明治期の俳書と俳誌に関する先行研究と重要資料**」は，本研究にかかわる先行文献を整理し，検討を加えている。文献は，刊行物と学術論文に分けて述べられている。また，俳諧・俳句は地域社会と密接な関係にあることから，各地域で作成された文献についても述べられている。

「**3　明治俳書刊行の推移**」は，明治時代における俳書及び俳誌の刊行の推移を概観し，俳文芸を伝える

メディアが，和装から洋装へと，木版から活版印刷へと推移していく過程の全体像について論じている。

「**4　明治期に刊行された和装の句集**」では，和装の句集の変遷を，実際の句集の形態と内容から具体的にとらえる。とりあげられた句集は，明治12年(1879)刊『古今俳諧明治五百題』，明治14年(1881)刊『しののめ』，明治20年(1887)刊『南総内田夜酔庵雪斎受号披露句集』，明治22年(1889)刊『明治俳諧金玉集』，明治42年(1908)刊『戊申月次集』の5点である。

「**5　活版印刷のメディアの変遷**」では，活版印刷によって刊行された俳書及び雑誌をとりあげ，俳句が，メディアの変化とともに近代化を進める状況を明らかにする。とりあげられたのは，明治14年(1881)年刊の『玉競四季廼魁』，明治15年(1882)刊の『岩木の栞』，明治10年(1877)創刊の雑誌『穎才新誌』，明治30年(1897)創刊の雑誌『ホトトギス』の4点である。

「**6　俳人書誌**」では，明治時代の俳人，卓郎，見外，為山，芹舎，等栽，乙彦，素水，春湖，旭斎，永機，月彦，梅年，羽州，精知，幹雄，金羅，桂花，唫風，鳴雪，十湖，雀志，史栞（史琴），機一，竹令，子規，紅葉，雪人，洒竹，碧梧桐，虚子，以上30人の書誌をまとめ，俳人ごとの書誌によって明治時代の俳文芸のメディアの変遷について述べる。

「**7　明治俳書総合目録データベース**」では，本研究の基盤となっている「明治俳書総合目録データベース」について解説する。データベースの基準等を示し，データの標準化の過程に発生した問題から，図書館における俳書の扱われ方についての問題についても論じる。また作成したデータベースの機能を利用して，明治俳書の分析を試みる。また，このデータベースによって作成された「明治俳書総合目録データベース」が資料として付されている。

審　査　の　結　果　の　要　旨

研究をおこなうにあたり，まずなされるべき先行研究の調査，およびそれについての検討については，本論文第2章においてそれが行われている。第2章では，先行文献をとりあげ，それについて考察を加えており，これまでの関連研究で何が述べられているかを明らかにし，またそれらを検討している。つまり本研究は，研究史をふまえたうえでの研究である。

本研究は，これまでの研究で取り扱われなかった明治俳書及び俳誌の変遷と，俳文芸の変化についての研究である。俳書と俳誌の変遷について明らかにすることは，明治時代の出版文化研究に有益なものであり，新知見の得られるものである。よって博士学位論文として意義のあるテーマとすることができる。

また，本研究は，直接的には，明治時代の俳書・俳誌資料の目録を整備し，そのデータを基にして，当時の俳文芸にかかわる活動が，どのように行われていたのかについて明らかにするところにある。また，間接的には，明治時代の新しいメディアが，江戸時代から続く伝統的な文化とつながり，あらたな形態・内容の文化を生み出していく事例を報告することも目的としている。

明治時代の俳書･俳誌の目録については，個々の機関が所蔵書の目録は作成してはいるものの，岩波書店『国書総目録』のような，全国的な目録は作成されていない。したがって，他の目録と比較したうえでの相対評価ではないが，作成された目録は，収録俳書数などから判断して，図書館情報学の観点からしても，すぐれた俳書・俳誌目録と評価することができる。

その目録とデータベースについては，第7章で解説されており，データの標準化の過程に発生した問題から，図書館における俳書の扱われ方についての問題についても論じられており，専門資料の扱い方についての新知見が示されている。また作成したデータベースの機能を利用した明治俳書の分析は，実物の実数に裏付けられたものであり，信憑性の高いものである。

第3章では，明治時代における俳書及び俳誌の刊行の推移を概観し，俳文芸を伝えるメディアが，和装か

ら洋装へと，木版から活版印刷へと推移していく過程の全体像について論じているが，その具体的な数量的変遷のデータは，あらたにえられた実証的なものであり，上記の目録作成の結果をふまえたものであることによって，その分析結果の信用性を高める結果となっている。新たな知見が得られている。

第 4 章では，和装の句集の変遷を，5 点の刊行物をとりあげて，実際の句集の形態と内容から具体的に考察を加えている。

また第 5 章では，活版印刷によって刊行された俳書及び雑誌を 4 点とりあげ，俳句が，メディアの変化とともに近代化を進める状況について述べている。

4,500 点にもおよぶ刊行物の中から，和装本，活版印刷本あわせて，わずか 9 点をとりあげただけなので，そこから得られることには限界はある。しかし，その 9 点の選び方，分析の仕方は妥当なものである。極端な事例とは考えられない。

第 6 章では，30 人の俳人の書誌をまとめ，俳人ごとの書誌によって明治時代の俳文芸のメディアの変遷について述べる。ここでとりあげられた 30 人は，当時の名だたる宗匠であり，その選定に関しては問題がない。またその分析についても妥当なものといえる。

明治時代の俳書や俳誌の推移における形態的な特徴は，和装から洋装への移行，及び木版刷りから活版印刷への移行にある。また内容的な特徴は，「俳詣」から「近代俳句」へという変化にあるが，その二つの変化は同時期になされている。例えば「俳句」という用語は，明治 10 年代に，活版印刷された俳書や俳誌にまず登場する。また，明治 20 年代に流行のピークとなる点取俳諧の句集には独自の形態があり，そこに収録された句には，点をとるための独自のレトリックが存在する。したがって，俳書や俳誌の書誌学的な考察は，俳文芸の研究と深くかかわっている。明治時代の俳文芸史の区分の検討などにも，俳書や俳誌の形態的な変化や刊行の状況の把握は見過ごすことのできない重要事項である。明治時代，俳文芸を伝えるメディアが，俳文芸の内容とともに変化していく過程を具体的に明らかにした本研究はすぐれたものと評価できる。

よって，著者は博士（情報学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。